

## テキスト種ウィットに見る異文化理解

植 田 康 成

### 1. はじめに

本論考の目標は、2 つある。一つは、いわゆる諸民族、諸国民に関するウィットを素材として、ドイツ言語文化圏以外の文化についてどのような理解がドイツ語のウィットから読み取れるかを確認していく<sup>1</sup>。そして、そのようなテキスト種ウィットを素材として、異文化を理解するためのどのような学習・教授法が可能かについて考えることが、もう一つの目標である。

### 2. 文化とは

筆者の考えでは、文化とは、暗黙知の体系である。その知識は、一連の行為の流れに関する手続き的知識である。その知識はある共同体の集団的記憶に基づいている。文化が暗黙の手続き的知識であることを典型的に示すのが、無形文化財という語である。そして暗黙知が顕在化したものが、有形の文化財である。いずれの言語共同体も、構成員の経験知を集約した形で伝承してきている。それが文化的伝統と称されるものである。

他者（他世界、他文化）に関する関心、体験、知識に応じて、個々人の異文化理解能力、異文化間コミュニケーション能力には、差があるのが通常である。それゆえに、他者（他世界、他文化）に接したときの対応、その接触において生じる問題の対処においても個人差が生じる。その差を埋めるため、個人間におけるコミュニケーション行為が生じてくる。知識における差を解消しようとする。最終的には、共同体成員間における知識が質・量ともに均等になることを目差しているのが、民主的な社会であるといえよう。個人間の異文化理解能力を同等に伸ばし、そして、文化間、社会間の情報量における平等をはかつていく点に、異文化間コミュニケーションの意味と目的があると考える<sup>2</sup>。

### 3. 異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力

異文化間コミュニケーションを可能にする異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力については、言語共同体が有する異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力と、言語共同体構成員（個人）が有する異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力を指定することができよう。共同体が有する異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力は、個人のそれを総体的に抽象化して捉えたものと考えることができる。

### 3.1. 個人における異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力

個々人間の接触、つまりは異文化間接触における体験知は内在化され、暗黙知となっていく。成長過程、学習過程における他者に関する知識、異文化に関する知識は、内在化され、個体における異文化理解能力、異文化コミュニケーション能力を形成していく。

現代社会では、あらゆる面において地球規模化（グローバリゼーション）が進行している。人、物の行き来だけでなく、情報の普及伝搬は、座して世界を展望し得る状況に至っている。しかしながら、生身の人間との接触、交流こそが、唯一の真正の体験、知識の源泉であることを忘れてはならない。異文化間コミュニケーションの意味は、まさにそこにある。それが自己の世界を豊かにし、広げることにつながるからである。

### 3.2. 共同体における異文化理解能力と異文化間コミュニケーション能力

個々人が経験する他者（他世界、他文化）との接触において得られた体験、知識は、当該個人が属する言語共同体におけるコミュニケーション行為によって、蓄積され、当該の言語共同体の共有財となっていく。そのような共有財が当該言語共同体が体現する文化財となり、個々の構成員を規定する暗黙の知識体系となる。それは、当該言語共同体が有する異文化間コミュニケーション能力と捉えることができる。

であるならば、可能な限り他世界、他文化と交流していくことが、当該言語共同体の異文化間コミュニケーション能力を高めることになろう。異言語学習は、その第一歩である。個々人が可能な限り多言語能力を身につけることが重要であることは言うまでもない<sup>3</sup>。しかし、言語共同体総体が多言語能力を身につけることがより肝要であろう。

## 4. テクスト種ウィットに見る異文化理解

テキスト種ウィットを素材としての異文化に関する学習・教授については、当該テキストで問題となっている事柄が、ドイツ語圏文化に関するものか、それ以外の言語文化圏に関するものであるか、という観点から観察することができよう。これは、とりわけ、諸民族、諸国民に関するウィット（いわゆるエスニック・ジョーク）を取り扱う場合に、有用な観点であるといえよう。

以下の論述においては、まず、ドイツ語のウィットのテキストそのものが、どのようなドイツ語文化圏以外の文化に関する理解を提示しているかを、諸民族、諸国民についてのウィットを素材として、可能な範囲内で、観察していく。具体的には、当該ウィットの落ちが、対象言語文化圏に関するどのような背景的知識に依拠しているかを考え、論述していく<sup>4</sup>。

### 4.1. 日本（人）に関するウィット

諸民族、諸国民に関するウィットを取り扱うというのは、きわどい課題である。特定の偏見の存在を暴き、その偏見の打破を目指しながらも、当該の民族、国民の怒りに触れる可能性が大きい。そこでは冷静、客観的な議論を行うことが難しくなる。

一番無難なのは、その対象となっている民族、国民に属する者が当該のウィットを取り

扱うことであろう。すなわち、本論考の場合は、日本人が揶揄の対象となっているウィットである。直接、間接に、日本人が揶揄されているウィットを取り上げ、それらのウィットから、日本人、日本文化に関するどのような理解が読み取れるかを見ていこう。

Was macht ein Ostfrieser bei Ebbe? Er verkauft Bauland an Japaner... (Wackel 2008: 87)

(東フリースランド人は、干潮になったら、何をするか。日本人に宅地を売る。)

金満家日本人像が高度経済成長時代に世界中に広まった。何でも買いあさる日本人、というイメージである。干潟を宅地とすることなどできない。満潮になれば、また海水の下である。干潟を干拓して宅地としてきたのが、江戸時代の日本人であり、そしてまた、高度経済成長時代の日本であった。海を埋め立てるという発想は、依然として、根強い。自然環境、生態系を守ろうという世界的な動きにもかかわらず、である。開発という名の、自然破壊を推し進めてきた日本人を揶揄しているともとれるウィットである。

Ein Österreicher und ein Japaner streiten sich um einen Parkplatz. Im Streit schlägt der Japaner den Österreicher mit einigen gekonnten Taekwondo-Schlägen zu Boden und lacht: "Ha! Ich Japaner! Ich können Taekwondo!" Der Österreicher schüttelt sich, steht auf, die beiden streiten weiter. Zack, wieder schlägt der Japaner den Österreicher nieder und sagt: "Ha! Ich Japaner! Ich können Taekwondo!" So geht das einige Male, der Japaner brüstet sich mit seinen japanischen Kampfkünsten, dann wird es dem Österreicher zu blöd, er öffnet wutentbrannt seinen Kofferraum, nimmt einen Gegenstand und schlägt den Japaner zu Boden. Der Japaner ganz verstört: "Wie kann das sein? Warum du plötzlich so stark?" Der Österreicher lacht und sagt: "Ha! Ich Österreicher, aber ich haben Wagenheber von Firma Toyota!" (Wackel (Hrsg.) 2006: 268-269) (言いあらそっているうちに、日本人がオーストリア人に足蹴りを食らわして、地面に倒した。「どうだ！俺は日本人だ。テコンドーのけりを見たか！」オーストリアの男は、立ち上がって、二人はまた争いを続ける。バシッ！また日本人が蹴りを食らわす。オーストリア人は地面に倒れる。

「どうだ！俺は日本人だ。テコンドーのけりを見たか！」幾度か蹴りが繰り返され、日本人は日本の武闘技術を誇る。オーストリアの男も我慢の限界に達する。怒り狂ったようにトランクを開け、取り出したもので日本人を地面に打ち倒す。日本の男は訳が分からない。「一体全体、なぜ急に強くなったんだ？」オーストリアの男は、笑う。「どうだ！俺はオーストリアの男だ！おれはトヨタのジャッキを持っているんだ！」)

オーストリアは、自国ブランドの自動車を生産していない。オーストリア国内を走っているのは、すべて外国車である。オーストリア人にとって、日本は、トヨタ、三菱、マツダ、ホンダ、スズキといったブランドの自動車と結びついて理解されている。そして、伝統的武闘である空手、合気道、柔道と結びついている。日本の男性は、誰もが、柔道や、剣道、合気道、空手ができると思いこんでいる向きが多い。テコンドーは、日本の空手道

が韓国に移入され発展したものであり、日本の武闘とはいえないが、オーストリア人にとっては、同じアジアの武闘として区別がないようである。自動車、電気製品以外で日本が連想されるのは、日本の伝統芸術といったものに限られるようである<sup>5</sup>。

ドイツ語表現について言うと、日本人の最初の 2 つの発言に出現している動詞が不定形になっている (können)。打ち倒された後の発言は、まともなドイツ語となっている。そして、ジャッキで日本人を打ち倒したオーストリア人の発言に出現する動詞が今度は不定詞となっている (haben)。言語表現としても立場が逆転していることが示されている。

Man hat einem digitalverwöhnten Japaner eine alte mechanische Uhr aus dem Schwarzwald geschenkt, die auch prompt nach einigen Tagen stehenbleibt. Der Japaner öffnet das Gehäuse, und eine Ameise fällt heraus. "Kein Wundel", sagt er, "Maschnist ist gestolben."

(Kunschmann 2003: 183) (デジタル漬けの日本人がシュワルツバルト製の鳩時計を贈ってもらったが、2、3 日するともう動かなくなった。日本人は時計の蓋を開ける。すると、蟻が落ちてきた。「なるほど、動力が力尽きたんだ。」)

パソコンの領域では隣の韓国に追い越された感のある近年であるが、日本製電化製品は世界中に普及している。時計もそうである。今ではデジタル時計がほとんどであり、ゼンマイ式は滅多に見かけない。

南西ドイツのシュワルツヴァルトは、鳩時計 (カッコー時計) の生産地として有名である。左右に垂れ下がった鉛製の松ぼっくりでゼンマイを巻く仕組みになっている。2、3 日毎に巻き上げる必要がある。しかし、この日本人は、そのことを知らない。止まったので蓋を開けてみたら、蟻が落ちてきた。その蟻が時計を動かしていたと思っているのである。

次のウィットも日本が工業先進国、しかも細かい技術に長けているということが背景を成している。

Erich Honecker besucht die Leipziger Messe. Er geht zum japanischen Stand, sieht ein kleines Gerät stehen und fragt, was es sei. "Das ist 'ne Kartoffelschälmaschine", sagt der Japaner. Erich wirft eine Karoffel rein, und sie kommt geschält wieder raus. "Gut", sagt Erich und geht zum amerikanischen Stand. Dort sieht er auch eine Kartoffelschälmaschine, nur etwas größer. Er wirft gleich mehrere Kartoffeln ein, und sie kommen geschält wieder raus. Erich geht zum DDR-Stand und sieht eine große Maschine. Er fragt, was das sei, und erfährt, dass auch das eine Kartoffelschälmaschine sei. Er fragt, ob er auch dort ein paar Kartoffeln einwerfen darf, der Standleiter sagt ihm, er könnte ruhig einen ganzen Korb reinschüttern. Erich Honecker tut es und wartet, plötzlich geht an der Seite der Maschine eine Luke auf, und es brüllt einer raus: "Ey, nicht so viel, wir sind bloß drei Mann hier unten"! (Wackel 2006: 101-102) (エーリヒ・ホネッカーがライブツツヒ見本市を訪問した。日本コーナーで小さな器械が展示されているのを見て、何の器械かと尋ねた。「ジャガイモの皮むき器械です。」との答え。エーリヒは、ジャガイモを一個入れる。すると皮がむかれたジャガイモが

出てくる。「いい器械だ」といって、アメリカコーナーに足を運んだ。そこでもジャガイモの皮むき器械が展示されていたが、日本製よりも大きめであった。数個のジャガイモを同時に投げ入れると、きれいに皮がむかれて出てくる。エーリヒは、DDR コーナーに行った。そこには、大きな器械が展示されていた。何の器械かと尋ねると、ジャガイモの皮むき器械との答え。2、3 ジャガイモを投げ入れていいかと尋ねる。すると、籠一杯のジャガイモを投げ入れても問題ないです、とのコーナーの責任者の答え。エーリヒ・ホネッカーは、籠一杯のジャガイモを投げ込んだ。そして待った。と突然、機械の横の小窓が開いて、誰かが怒鳴った。「おーい、そんなにたくさん入れるな。下には、3人しかいないのだから。」)

Flug 130 von Tokio in die DDR. Der Pilot setzt zur Landung an. Die freundliche Durchsage ertönt: "Sehr geehrte Damen und Herren, bitte stellen Sie das Rauchen ein, legen Sie die Gurte an und stellen Sie Ihre Uhren um 30 Jahre zurück! (Wackel 2006: 88) (東京からDDR への130便、着陸態勢に入った。機内アナウンスが告げる。「ご搭乗の皆さん、たばこは控えてください。ベルトをおしめください。時計を30年後戻りさせてください。」)

かつてのDDR がいかに世界の発展から取り残されていたかを落ちとしているウィットである。工業技術の発達に見られる日本とかつてのDDR とのタイム差は、30年にも及んでいるというのである。

#### 4.2. 中国（人）に関するウィット

Sagt der Mann zu seiner Frau: "In der Zeitung steht, dass die Chinesen weniger Ente essen." Meint die Frau: "Oje, schlechte Zeiten für die Hunde." (Wackel 2008: 117) (亭主が妻に向かって言う：「中国人はアヒルを食べなくなっている」と新聞にあるぞ。妻が言う：「まー、犬には辛い時代がくるのね。」)

中国4千年の歴史は、食文化において際だっている。あらゆる物が食卓に上ってくるとも言われている。中国といえば、中国料理。中国料理といえば、北京料理。北京料理といえば、アヒル料理と、連想される。アヒルを食べなくなっているとしたら、その代わりに食べられるのは犬、というわけである。といっても、犬が食されるのは、特別の機会に限られ、食用の特別種が飼育されている。日常的に食されているわけではない。

中国は世界中に中国料理を広め、世界の食文化に大いに貢献している。と同時に、世界に多くの食料を輸出してもいる。しかしながら、中国の経済発展にともなって、いつまで安定的に食料輸出国であり得るのかは、いろんな面で疑問符が付きだしているのが、昨今の中国であるようである。

次のウィットは、もっと微妙な問題に関わっている。しかし、誤解を恐れずに言えば、1989年6月4日の天安門事件以来、中国における人権問題は、つねに国際的な議論を引き起こしてきていることは、事実である。2008年の夏季オリンピックの成功の裏に隠されて

いたものが何であるか、目を凝らしてみていく必要があるといえよう。

Beim PISA-Test wurde folgende Aufgabe gestellt: "Schreiben Sie bitte Ihre eigene freie Meinung zum Thema Lebensmittelmangel in anderen Ländern auf!" Afrikaner, Amerikaner, Deutsche, Lateinamerikaner und Chinesen wurden gefragt. Alle bekamen null Punkte, denn keiner verstand die Frage. Die Afrikaner hatten keine Ahnung, was "Lebensmittel sind, die Amis wussten nicht, was "andere Länder" sind, und die Deutschen verstanden "Mangel" nicht. Die Lateinamerikaner kapierten nicht, was man unter "bitte" verstehen soll, und die Chinesen konnten sich nicht erklären, was eine "eigene freie Meinung" ist! (Wackel 2008: 107)

(PISA 試験で、次の課題が課された：「諸国における食糧というテーマについて、自由にあなたの意見を述べてください！」アフリカ、アメリカ、ドイツ、ラテンアメリカそして中国の児童が試験を受けた。全員 0 点であった。誰も質問の意味が分からなかったのである。アフリカの児童は「食料」が何を意味するのか、分からなかった。アメリカの児童は「他の国々」というものを知らなかった。ドイツの児童は「不足」ということが理解できなかった。ラテンアメリカの児童は「述べてください！」という言い方が理解できなかった。中国の児童は「自由なあなたの考え」ということの意味が分からなかった。)

#### 4.3. ポーランド (人) に関するウィット

Was heißt BMW auf Polnisch? Bald Mein Wagen. (Wackel 2008: 108) (BMW をポーランド語で言うと? 「やがて、おれの、車」だ。)

頭文字語の多義的な解釈の一例でもあるが、他方、経済的に貧しいポーランドの事情を反映しているウィットでもある。BMW は、Bayerische Motorwerke (バイエルン自動車会社) という名前の頭文字をとったものであるが、これを別様に解釈しているのである。

#### 4.4. スコットランド (人) に関するウィット

Was ist der Unterschied zwischen einer schottischen Hochzeit und einer schottischen Beerdigung? Auf der Beerdigung gibt es einen Säufer weniger! (Wackel 2007: 67) (スコットランドの結婚式と、葬式の違いは? 葬式の時はひとり飲み助の数が少ない。)

嬉しいときであれ、悲しいときであれ、いずれにしろ、酒が欠かせないというのは、どの社会でもあることであろう。スコットランドでは、少しばかり度が過ぎているということであろう。このウィットは、いわゆる渡りのウィットの一例である。スコットランド人 (schottischen) をポーランド人 (polnischen)、あるいはバイエルン人 (bayerischen) に変えると、それぞれの人々を笑いの対象にしたウィットが成立する。酒飲みを笑いの対象としたウィットのひとつである。

#### 4.5. メキシコ (人) に関するウィット

Warum hat Mexiko keine Olympiamannschaft? Weil jeder Mexikaner, der laufen, springen und schwimmen kann, schon über die Grenze ist. (Wackel 2008: 119) (なぜ、メキシコ

はオリンピックチームがないのか。走り、跳び、泳げるメキシコ人は、とっくに越境してしまっているからだ。)

問題となっている国境はアメリカ合衆国とメキシコ間の国境である。メキシコからアメリカに越境していく人々は多数に上る。一番の理由は、経済的なものである。世界の多くの地域で多くの人々が、さまざまな理由から故郷を離れ、祖国を離れ、身体ひとつで異境の地で生きることを余儀なくされている。故郷を捨てるということの重みを痛いほど分かっているけれども、そうせざるを得ない理由があるのである。

#### 4.6. イタリア (人) に関するウィット

Ein Amerikaner und ein Italiener streiten sich. Der Amerikaner: "Gib mir Eisen und Stahl, und ich baue dir einen Flugzeugträger!" Der Italiener: "Gib mir eine Frau, und ich mache dir die Besatzung dazu!" (Wackel 2007: 238) (アメリカ人とイタリア人が言い争っている。アメリカ人:「鉄鋼材をくれ、そしたら、空母をつくってやろう!」イタリア人:「女性をひとりくれたら、乗組員を作ってやろう!」)

イタリア人はその方面でたくましいということであろう。イタリア人については、まり芳しくないイメージがはびこっているようである。次のウィットからは、怠け者であり、いつまでも独り立ちしないイタリア人ということが読み取れる。

Warum sind Italiener so klein? Weil ihre Väter gesagt haben: "Wenn ihr groß seid, müsst ihr arbeiten!" (Wackel 2007: 241) (イタリア人が幼いのはなぜ? 父親が言うからだよ:「大人になったら、働かなくちゃならんぞ!」)

もちろんイタリア人だからといって、働かないわけではない。誰も、生きるためには働かなければならないのである。しかし、労働を含めての、生き方についての価値観が違うということはあると感じる。ものは考えようということなのかもしれない。

一例を挙げる。2008年3月末イースターの休暇を利用して、イタリア語の実地学習に出かけた。当初は、ベルガモ近くのトレビリオという町の駅前のホテルに泊まる予定で、事前に予約してあった。出発直前になって、急にホテルの方からキャンセルしてきた。理由は、イースター期間中宿泊予定者の数が少なく、ホテルを営業するよりも、休みにして、ホテル経営者自ら休暇旅行に出かける方が、ましだと考えたということである。日本では、あり得ないことである。何よりも自らのことを優先するというのがイタリア的なものかもしれない。必要な限りにおいて労働もする、ということなのであろう。

同様のことを、オーストリア・グラーツでも経験した。グラーツを訪れる観光客に人気の Zotter というブランド名のチョコレートがある。シュタイアーマルク州の名産物であるカボチャ油をはじめ、種々の風味のチョコが珍しい。工場は、グラーツからかなり離れた南の方の田舎町にある。グラーツ市内では、2、3の特定の店でしか売っていない。筆者も土産に買おうと思って、当該の土産物店に行ってみしたが、なかった。どうしてないのか、と尋ねると、現在は作っていない、との答え。店じまいしたのか、と尋ねると、そうでは

なく、休暇旅行に出かけて、しばらく作っていない、ということであった。これも、日本では考えられないことである。

しかし、翻って考えてみると、必要以上には働かない、必要以上には生産しない、というのは、非常に学ぶべき姿勢だと思われた。儲け第一に、働き、作りまくるというのは、どこかに無理が生じてくるであろう。ここ 1 年ほど前から日本国内で問題となっている食品をめぐる賞味期限の改ざん、産地偽証、羊頭狗肉を実地でいくような商品販売等、不況という要因もあるのであろうが、すべては、儲け第一主義に起因していると思われる。

#### 4.7. 諸国民の対比

Ein Luxusdampfer verunglückt, doch die Rettungsboote reichen nicht. Jeder bekommt eine Schwimmweste und soll springen, aber keiner traut sich. Die Crew ist verzweifelt. Schließlich wird der Kapitän gerufen. Dieser geht zu der Gruppe, die ängstlich an der Reling steht, und redet mit ihnen. Dabei springt einer nach dem anderen ins Wasser. Als alle Passagiere von Bord sind, fragt der 1. Offizier den Kapitän, wie der die Leute denn überreden konnte. "Na ganz einfach", meint dieser. "Zu den Deutschen habe ich gesagt, es ist ein Befehl. Zu den Franzosen, es wäre patriotisch. Den Japnaern habe ich versprochen, dass Springen gut für die Potenz wäre. Und den Italienern habe ich gesagt, Springen sei verboten." (Wackel 2007: 78) (豪華客船が遭難した。しかし、救命ボートが足りない。乗客は全員救命胴衣を着け、海に飛び込むことになった。しかし、誰も飛び込もうとしない。乗組員は途方に暮れ、船長を呼びにいった。船長は不安げに舷側に立ちすくんでいる人々のところに行って話しかけた。すると、次から次、海に飛び込んでいった。乗客全員が海に飛び込んだ時、一等航海士は船長に尋ねた。どういう具合にして乗客を説得したのか、と。「なに、とても簡単なことだよ」と船長はいう。「ドイツ人には、これは命令だ、といった。フランス人には、愛国心の証明だ、と。日本人には、海に飛び込めば精力が増すと請け合ったんだ。そして、イタリア人には、飛び込み禁止だ、と言ったんだ。）」

#### 5. おわりに

諸民族、諸国民を笑いの対象としたウィット、いわゆるエスニック・ジョークは、それらの対象に関するステレオタイプの理解に依拠して成立している。逆に言えば、それらのウィットからは、固定的とはいえ、それらの対象についてのとりあえずの理解を取り付けることができる。認知的不協和をとりあえず解消するのに役立つ。しかしながら、それらのステレオタイプは、自らの経験、体験によって、修正されるべきものであるということ意識しておくことが重要である。

金に飽かして何でも買いあさる日本人を揶揄したウィットを上で紹介したが、日本人についてのそのイメージは、あるイタリア語学習書にも登場している。イタリア 16 世紀の自然主義・写実主義画家カラバッチョ Caravaggio が最後にキリストを描いた絵がイタリア



のどこかの修道院に秘蔵されており、美術史を研究する女性はその所在を突き止めるという筋の物語である。その彼女を、金儲けしか念頭にない美術商がつけ回す。美術商は、見つけ出したカラバッチョ最後の絵画を日本人に高く売りつけて、もうけを山分けしよう、と持ちかけるが、主人公の女性は、美術品はすべての人々のものであり、公開されるべきだという信念で、その誘いを突っぱねる。という話を聞いた主人公の男友達の発言として、"Questi giapponesi...Vogliono comprare tutto!"（この日本人！．．．何でも買おうとする！）という一文が出てきている（Campanini 1999: 12）。

教科書という媒体は、多くの場合、学習者にとっては初めての新しい知識を伝えるものである。語学学習の場合、その目的は学習対象言語に関する知識であり、言語テキストで述べられている事柄自体にはそれほど重きはおかれていないと言えよう。とりわけ、初学者向けの教科書においてはそうであると言える。そうであるが故に、なおのこと、そのようなテキストで伝えられる特定のイメージは、無批判に、素直に受け入れられていく。

初学者用の教材であればあるほど、異文化に関する情報の伝達には細心の注意を払うべきであろう。そう考えるならば、テキスト種ウィットを異言語文化教育素材として投入することに対しては、初級段階においては極めて慎重であるべきだということになる。学習者の側にもかなりの批判精神がすでに培われていると考えられる段階、ある程度自ら主体的な思考が可能な段階に達した学習者を対象とする授業ではじめて使用可能だと考える。あるいは、異文化に関する偏見、ステレオタイプの存在を意識させ、それらがどうして生じ、伝承されてきているのか、自らの経験、体験と照合して、その真偽を問い、修正していくことが必要であろう。そのような前提のもとで初めて、テキスト種ウィットを異言語文化教育素材として外国語としてのドイツ語授業に投入することが、意味を有することになろう。

## 6. 注釈

1 テキスト種ウィットが提供してくれるドイツ語文化圏に関する種々の知識、いわゆるランデスクンデについては、他のところ（植田 2007）で論述した。

2 たしかに、「異文化コミュニケーションあるいは交流にとって、最大のきっかけは、他国の征服であり、それを実現する最も大きな要因は戦争である。」（倉田 2007: 9）というのは、冷徹で挑発的な歴史的認識といえるかもしれない。しかし、筆者はあるべき姿を求めての論考を行っているという認識でいる。

3 2007年11月17日（土）14:00-17:00 京都大学吉田南キャンパスで開催された「日本言語政策学会第2回関西研究会」における西山教行氏の報告「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」では、多言語主義（multilinguisme）は社会におけるもの、複言語主義（plurilinguisme）は個人におけるもの、という区別がなされていた。言語政策の観点からいえば、個人における多言語能力を涵養するだけでなく（複言語主義）、社会における多言語能力を涵養していくことも同様に必要であろう（多言語主義）。そうであってこそ、

言語共同体総体としての異文化間コミュニケーション能力は高まっていくと考える。国際共通語としての英語教育は確かに必要であろう。しかし、その上に可能な限り多様な言語の教育を社会全体として行っていくことが、グローバル時代には必要とされるだろう。世界の文化は決して一様化されるものではないし、されるべきものではないからである。

4 オリジナルは、英語であるが、『日本人のまっかなホント』（J.ライス／喜治佐保子／浜矩子著、小林宏明訳、マクミランランゲージハウス刊、1999年）を含む『まっかなホント』シリーズは、諸国民に関するステレオタイプを楽しく読める形で取り扱いながらも、反省を促す。ただし、ユーモラスな笑いを誘う文章ではあるが、ウィットそのものが対象として取り扱われているわけではない。

5 このことは、ドイツ語に取り込まれた日本語を検討してみても、頷ける。ドイツ語に借用された日本語のほとんどは、俳句、和歌といった伝統芸術、空手、柔道といった古来の武闘あるいはそれらに関する語彙である（植田 2002 を参照）。

## 7. 参考文献

倉田 2007：倉田稔「異文化コミュニケーション」、『Language Studies』第15号、9-17頁。

植田 2002：植田康成「Japanische Wörter im Deutschen」、『ニダバ』（西日本言語学会）第31号、121-125頁

植田 2007：「言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーウィットに見るランデスクンデー」、『広島大学文学研究科紀要』第67巻、55-73頁。

夜陣 2003：夜陣素子『20世紀ドイツ文学におけるシンティ・ロマ像』、広島大学博士論文。

Campanini 1999: Federica Campanini, *L'ultimo Caravaggio*. Firenze: ALMA Edizioni.

Kunschmann 2003: Doris Kunschmann, *Die besten Witze von A-Z*. München: Bassermann Verlag.

Wackel (Hrsg.) 2006: Dieter F. Wackel (Hrsg.), *Das große Witze-Feuerwerk*. München: Knaur Taschenbuch Verlag.

Wackel 2006: Dieter F. Wackel, *Das große Witzeknaller*. München: Knaur Taschenbuch Verlag.

Wackel 2007: *Der große Witzparade*. München: Knaur Taschenbuch Verlag.

Wackel 2008: *Wahnsinnswitze*. München: Knaur Taschenbuch Verlag.

（本論考は、研究課題「言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーその潜在的可能性に関する基盤的研究」（基盤研究（C）：課題番号：17520379）で交付された科学研究費補助金による研究成果の一部である。）